

南方熊楠とヘンリー・ソロー

奥田 穰 一

Kumagusu Minakata and H.D. Thoreau

Joichi Okuda

近年、南方熊楠や H. D. Thoreau はブームを迎える。彼らの再評価がどんどん進められている。奇人、変人、巨人、偉人などと称された在野の学者、すなわち博物学、民族学、植物学、粘菌学、宇宙哲学、深層心理学、さらには心靈学までを究め尽くした南方熊楠——業績についてよりも、むしろ、その面白い逸話について多く語られてきた南方——は、紀州那智の山中でロンドン大学総長、V. Dickins に協力し鴨長明の『方丈記』を英訳した。南方は長明と Thoreau の人生観の共通点を指摘し、長明を「日本の12世紀の Thoreau」と呼ぶ。(『南方熊楠全集』(1971) (第10巻 3-25)。南方がいつ、どこで、今日ネイチャーライティングの原型とされる Thoreau の作品を読んだのか未だ誰も明らかにしていない。私自身も時間をかけて調べたのであるが残念ながら明らかにできなかった。

南方熊楠について最も重要で示唆に富む意見を提出した鶴見和子氏は、のみならず、南方と Thoreau の親近性を最も早く論じた研究者であった。鶴見氏は『南方熊楠』(1981)において、Thoreau と南方が自然を愛して森に住み、官憲に抵抗して投獄されたこと、環境保護を訴えたことなどの点において相共通するという。(233-41) 鶴見氏は南方のまことに優れた研究者、理解者であったが、しかし、Thoreau の専門の研究者ではなかった。以下、Thoreau の研究者としての立場から、私なりに南方と Thoreau について少しく論じてみよう。鶴見氏のユニークな南方論のうち最重要の部分を Thoreau との関連で窺おう。

鶴見氏がいうように南方は「幼年より真言宗に固着し、常に大日如来を念じて育った」(208)のであった。「大乘仏教に原因結果の連鎖」を、科学的宇宙観を見出し真言曼荼羅を南方曼荼羅に読み替えた人物であった。(23, 85) 南方が「常に念じて育った」大日如来、大仏・大宇宙仏とはヒンズーとしての Thoreau がそれとの一致を鋭意目指していた大宇宙我・ブラーマ・梵に他ならない。Thoreau にも梵我一如の教説が深く浸透していたのだ。われわれが南方と Thoreau に大日如来・梵を見出すとは、それは取りも直さず、今日の環境問題との重大な関わりを南方と Thoreau に指摘することだったのである。『即身—密教パラダイム』(1988)において、松長有慶氏はこう説明する——「自然を対象化し、人間の飽くなき欲望達成のための手段とみる近代文明の主潮流

がいま永年にわたってしいたげられてきた自然から手ひどい返礼を受けようとしており、それを回避するためには、自然と共存してきた歴史を持つ東洋思想、さらには人間を含めた自然界全体を、真理を人格化した大日如来の顕現とみて、宇宙を一つの生命体と把える世界観が見直されねばならないわけです(18)。南方と Thoreau は共に大日如来・梵との一致を、「ひとつの生命体」という「宇宙」との一致をめざしていたのであり、両者の環境保護運動は彼等におけるこの東洋思想、「宇宙」哲学と切り離し得ないものなのである。もし切り離し論じるなら、どうしても皮相な主張とならざるを得まい。

南方熊楠に大宇宙仏を暗示する南方曼荼羅が存在したとするなら、Thoreau にも彼の曼荼羅が、ブラーマを暗示する“宇宙の縮図”が存在したのであり、すなわち David C. Smith が *The Transcendental Saunterer* (1997) でいうように、“Walker”の Thoreau は北米コンコードの地で毎日、周囲の自然を観察しながら「自分がその中心である小宇宙 (microcosm)」を発見していたのだった。(60)「大宇宙 (macrocosm)」と同質である「小宇宙 (microcosm) の「中心」的存在であること確認していたのだ (61-2)¹⁾。Thoreau は自然界のいたるところに“circular”なイメージを見出していた。²⁾そして、C. G. Jung によればサンスクリットで“circle”とは曼荼羅を意味した。(Collected Works 第9巻第1部, 387)Thoreau により見出された、それぞれの“circle”は Thoreau がその「中心である小宇宙 (microcosm)」と同心円をなすイメージ、やはり曼荼羅を暗示するはずのものであったとみなし得るのである。Thoreau は *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) (以下 *A Week* と略す。) で「太陽は人間ほど中心的ではない」(373) とあえていう。ここで Thoreau は自らが梵・大日如来—曼荼羅の中軸をなし、その知恵の光が太陽の光をしのぐとされる大日如来—との一致をめざす存在であると暗示しているのであろう。

『女書生』(1996) で鶴見氏も説明するように、1892年 *Monist* でアメリカの科学哲学者 Charles Sanders Peirce により「リアルチャンス (実在する偶然性)」という言葉が始めて用いられたのであった。(213) 必然性が分からないがゆえに、何かが偶然起きているように見えるだけでなく、じっさい存在自体が「リアルチャンス」を含むと Peirce は説いたのだった。鶴見氏によれば、Peirce と南方はほとんど同じ時期にこの「リアルチャンス」に気付いていたのであるという。(213) 南方曼荼羅には仏教の「縁」なる偶然性が織り込まれており、この「縁」とは「リアルチャンス」なのである、と。(208) ではなぜ南方は「リアルチャンス」についての論文を発表しなかったのか。鶴見氏はそのゆえんをこう説明する——「科学は必然法則の探求であると、みんなが信じているとき……偶然性と必然性との複雑な絡まり合いを考えなければ物事の把握はできないのだと主張する。これは恐ろしいことです」。(218) 鶴見氏によれば、結局、南方がユニークな自説を発表しなかったのは、「恐ろし」かったからであった。鶴見氏の意見は正鵠を射たものといえるだろう。

南方曼荼羅が「リアルチャンス」を含むものであったとするならば、それなら Thoreau の曼荼羅についてはどうだろう。むろん Thoreau が「リアルチャンス」に気付いていたとは考えられな

い。Thoreau が死んだのは1862年である。死の間際に彼が気付いたとしても Peirce よりは30年も早いことになってしまう。だが、近年 Thoreau の批評家もいうように Thoreau は人間の善への志向などには全く無関心な自然の存在を意識していたのだった。のみならず、よく見れば Thoreau はあまりにもしばしば人間の予測できない偶然性について語った人物であった。しかも最も重要な文脈において語るが多かったのだ。たとえば Thoreau は彼の *Walden* (1854) の最後の章、18章でウォールデンにおける生活をふり返り、こう述懐する——“I left the woods for as good a reason as I went there. Perhaps it seemed to me that I had several more lives to live, and could not spare time for that one. It is remarkable how easily and insensibly we fall into a particular route, and make a beaten track for ourselves.” (343)——それから続いて自らのウォールデンにおける「生活体験」では「もし人が自分の夢の方向へ自信をもって突き進み、心に抱いていた生活を送ろうと努めるならば、普段では思いがけない成功 (a success unexpected in common hours) に出会う」ということを、またこのとき「新しい～自由な法則が自分の内部にも周囲にも確立しはじめる」ということを「学んだ」と、説いているのである。(343-45) さらに *Walden* の終わりでは Thoreau 自身の「復活」を象徴する「昆虫」が「思いがけなくも (unexpectedly)」テーブルの「年輪層」の底から現れ「夏の生活を楽しむ」ために空に舞い上がったのだった——“Who does not feel his faith in a resurrection and immortality strengthened by hearing of this? Who knows what beautiful and winged life, whose egg has been buried for ages under many concentric layers of woodenness...,——may unexpectedly come forth from amidst society’s most trivial and handselled furniture, to enjoy its perfect summer life at last?” (354)

Thoreau の曼荼羅もある意味での偶然性を含むはずのものだったのである。Thoreau において見いだされる種々の偶然性のうちでも、1946年、Thoreau が襲われた思いがけない危機体験こそは、とりわけ注目に値する。メインの森のカターダン山頂で Thoreau はあまりにも凄まじい、荒涼と人間疎外を体験していたのであった。*The Maine Woods* (1983) で Thoreau は「カオスと太古の夜 (Chaos and ancient Night)」(64) を見出し、戦慄していたのだった。³⁾ Leo Stoller が、*After Walden* (1957) で1846年、Thoreau の「汎神論的」に統一されたかつての「宇宙」がなすべき術もなく「ばらばらに分解」したままだったと説くゆえんなのである。(47) だが、カターダン山頂での Thoreau の危機体験が、Thoreau にある変化をもたらしたとみなす Stoller のごとき批評家はこの危機の瞬間をあまり過度に重視していたのではないだろうか。たしかにそれが一つの暗く重い体験として Thoreau に相当深刻な影響を与えたことは否定できないのであるが。“Thoreau: Speaker for Wildness” (1970での Jonathan Fairbanks の示唆的な意見によれば Thoreau とは変化する、あるいは進展する思想家ではなく、ただ「動揺」する思想家だったのであり、カターダン山頂での Thoreau の体験も Fairbanks にはあまり過度に重視されてはならないはずのものだった。(487-506) じっさい Thoreau はよく見ればカターダン山頂で「カオスと太古の夜」に向かってヒロイックにこう呼びかけて彼自身の「光への道」をめざしていたのでもある。

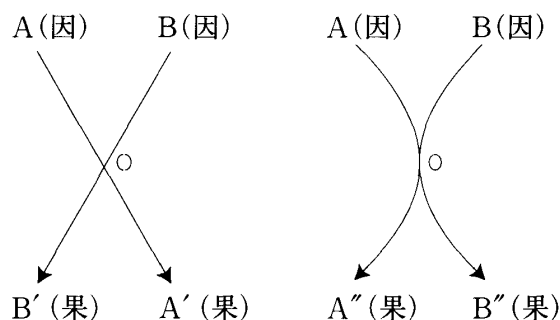
“Chaos and ancient Night, I come no spy
 With purpose to explore or to disturb
 The secrets of your realm, but ...
as my way

Lies through your spacious empire up to light.” (*The Maine Woods*, 64)

Walden で Thoreau 自身の「復活」を表徴する「昆虫」が「思いがけなくも」テーブルの「年輪層」の底から現れ、最も強烈な光の「夏の生活を楽しむ」ために空へ飛翔していったとするなら、*The Main Woods* の Thoreau は「カオスと太古の夜」の体験のあと「光への道」を辿っていたのだった。前者の Thoreau と比べれば、後者の Thoreau はどうしようもなく暗いのであるが、後者の Thoreau が体験した「カオス」、「カオスと太古の夜」が「光」と対照をなしていたことを見落とすはなるまい。

鶴見氏によれば、南方曼荼羅に含まれる偶然性とは「19世紀から20世紀への変わり目のパラダイム転換」を説明する「新しいことば」としての「カオス」と呼べるものであるという。（『女書生』218）カタードン山頂との Thoreau の「思いがけない出会い」、「宇宙」が「ばらばらに分解する」危機体験が「新しいことば」としての「カオス」において説明されるものであったなどと、ここでいうつもりはない。しかし、1846年以降、Thoreau の曼荼羅にはある「カオス」、偶然性がより深く暗示されるものとなっていたとはいえるだろう。それを否定することもできまい。

カタードン山頂の、荒涼とした「非人間的な自然」を Thoreau が「必然と運命が住まう……家 (home...of Necessity and Fate)」と呼んでいたことは注目したい。（*The Main Woods*, 70）すなわち Thoreau はカタードン山頂において「カオス」、偶然性だけでなく「必然」をも発見していたのだった。鶴見氏によれば、南方曼荼羅には「必然と偶然とを同時にとらまえようとした仏教科学」が見出され、南方はこの「仏教科学」が「西欧自然科学の上を行くものであると喝破した」のであった。（209）鶴見氏は「仏教は因縁をいう。因縁の因は因果律である。したがって、これは必然法則である。縁とは何かというと偶然性である」と、次のように直線と曲線の2図を示すのである。



カタードン山頂で「カオス」と「必然」を同時体験した Thoreau とは、鶴見氏の言葉を用いていると「必然と偶然とを同時にとらまえよう」とした Thoreau 自身だったといえるのではないか。このとき Thoreau の曼荼羅をわれわれが示すとするとするなら、それが何か南方茶羅と似たものになっても不思議はあるまい。

鶴見氏は、なぜ南方が「偶然性ということにこんなに早く気がついた」かということ、それは南方が「近代科学一辺倒ではなくて大乘仏教の知識をしっかりとっていて……この2つの異文化を格闘させることによって新しい知見を得た」ためであるという。(214) さらに、南方が「動物と直物の中間の微小な生物」である、どちらかに決定できないファジーな粘菌の研究者であったためであると、じっさい南方が描いた粘菌図と曼荼羅図は「よく似ている」ともいう。(214-15) 時代は「ニュートン力学の必然論から量子力学の偶然性を採り入れる方法」に……、「微小な生物から巨大な物を見るという接近法」に変わったのであると説明する。(216) さらに「一番大事なことは粘菌が生物の原初形態であるということである。原初形態ということに非常にその頃の自然科学が関心を持っていたということ」はあるにせよ南方は「原初形態を大事にしようとした。原初形態を見ることを通して、現在の生物の姿、現在の人間の姿を考えるよすがとしたのである」とつけ加える。(217)。要するに、鶴見氏によれば、「原初形態を大事にしようとした」南方は「ファジー」で「微小な」粘菌研究を「大事にしようとした」のであり、そしてそのことこそは、取りも直さず南方が「偶然性ということにこんなに早く気がついた」理由を説明するものなのであった。

カタードン山頂で思いがけないくも、自らの想像をはるかに超えた「カオス」を、偶然性を体験した Thoreau に目を転ずるなら、この Thoreau の体験は Emerson 哲学と深く関わるはずのものだったといえるだろう。John H. Hicks が編集した *Thoreau in Our Season* (1962) で Truman Nelson は適切にも1842年における、超絶主義に関する Emerson の講演こそは、まさに Thoreau を“made”したと強調し Emerson のこの言葉を引くのである——“I do not wish to do one thing but once. I do not love routine.” (Hicks, 135-36) そして Emerson を代弁しながら超絶主義者をこう説明する——“〈To him〉everything has to be instinctive and new.” (136) さらに Nelson は「超絶主義者の行動」とは「革命的 (revolutionary) である」とつけ加えるのである。(136) すなわち Paul Hourihan が “The Inner Dynamic of the Emerson—Thoreau Relationship” (1967) において Thoreau が Emerson の「弟子」として Emerson 哲学を実践することは、Thoreau が「新しいタイプの人間」になること、「Emerson の人格の支配」からのがれることであったと、Emerson もそれを「励ましていた」と論じたゆえんである。(Introduction xii-xiii) Nelson や Hourihan の意見に基づきながらいえば、カタードン体験によって Thoreau がショックを受けたとするなら、「カオス」を体験したとするなら、また「新しいタイプの人間」になったとするなら、少なくとも、[新しいタイプの人間] に近づいたとするなら、それは Emerson 哲学そのものの有する性格によって促された必然的な結果だったことになるであろう。

すでに見たように *Walden* において Thoreau は、ウォールデンの森を去ったのは彼が “particular route” にはまって、いつしか「無感覚」になっていることに気づいたためであると述べ、それから「思いがけない成功」について、「新しい……自由な法則が自分の内部にも周囲にも確立し始める」ことについて語っていたのだった。すなわち、*Walden* は構成上、「無感覚」の超克の後に「思いがけない成功」を達成する作品だった。さらに詳しくは、その超克のあとに「カオス」体験と深く結びつく「思いがけない成功」を実現する、やはり Emerson 哲学を実践した作品だったといえるだろう。*Walden* 第17章、作品を事実上結ぶ章での「思いがけない成功」を告げる「カオス」体験，“revolutional” な混乱状況に注目しよう。*Dark Thoreau* (1982) で *Walden* 17章の春について最も鋭く示唆に富む意見を述べた Richard Bridgman は春の土手で雪溶けの砂や土の流れが絶え間なく生み出す「肝臓、肺、腸の山」—“there is no end to the heaps of liver, lights, and bowels, as if the globe were turned wrong side outward” (17章 [春], 329)—が Thoreau には「うんざりする」ような “chaotic” なイメージだったという。(142) 雪溶けの流れを眺める Thoreau の心の中でさまざまな思いが、たとえば “slime, hypocritical sentimentality, womannishness, filth” が「互いに入り乱れた」のであると説明し、続いてこう論じる—“At the same time, creative warmth, blood, the womb, and sex were all confusedly mingled with the images of revulsion.” (140) Bridgman は Thoreau の批評家が雪溶けの流れを眺める Thoreau を「ポジティブ」な意味で捉えるが、しかしよく見れば Thoreau は “violent” な「何か」が [自然に加えられている] のを感じていたのであると論じたのだった。(145) さらに Bridgman によれば Thoreau はウォールデン湖の氷の溶解をも “violent” で “subversive” とみなしていたという。(139) Thoreau の批評家を「ポジティブ」と批判する Bridgman 自身はかなりネガティブな批評家だった。Bridgman も17章に [カオス] を体験する Thoreau を見出したといえるのであるが、この体験が「思いがけない成功」とつながるとみなす立場からいえば、じっさいあまりにもネガティブなのだ。

17章の終わりに近く Thoreau がこういう。

“We need to witness our own limits transgressed,.... There was a dead horse in the hollow by the path to my house,...., which compelled me sometimes to go out of my way, ... but the assurance it gave me of the strong appetite and inviolable health of Nature was my compensation for this. I love to see that Nature is so rife with life that myriads can be afforded to be sacrificed and suffered to prey on one another; that tender organizations can be so serenely squashed out of existence like pulp,— tadpoles which herons gobble up, and tortoises and toads run over in the road; and that sometimes it has rained flesh and blood! With the liability to accident, we must see how little account is to be made of it. The impression made on a wise man is that of universal innocence.” (338)

Thoreau 「自身の限界が超克され」、つまり「カオス」が体験され、「新しい……自由な法則」が Thoreau の「内部にも周囲にも確立し始め」ていたのだった。Thoreau は “inviolable health of Na-

ture”と一致し“wise man”として“universal innocence”を、大宇宙我・ブラーマとの一致を、*Walden*の理想を実現するところだったのである。ここで、Thoreauは「起こりやすい“accident”、つまり「カオス」体験から「思いがけない成功」までの経緯を語っていたといえるのである。Thoreauらしくも偶然性に深くこだわりながら語ったのだ。

The Concord Saunterer (1940) で Reginald Lansing Cook は、Thoreau がカタードン山を「単なる自然」とみなしていたけれども、このとき Thoreau は「大喜びしていた (exulted)」(12) という。また Robert High Baker は “The Unsettled Wilderness” (1979) で Thoreau がカタードン山頂で自分自身を「物質である」とみなしながらも、むしろみなすことで「うきうきしていた (exhilarating)」と、「真の詩人」として「男らしく」世界と関わろうとしていたという。(4) Thoreau のカタードン体験が “exulted” なものであったと、あるいは “exhilarating” なものであったと述べた Cook と Baker, 両者は微妙に異なるとはいえ、互いに劣らず傾聴に値する。彼らの意見もまたある意味で Thoreau がカタードン山頂での「カオス」体験において「思いがけない成功」を味わっていたことを裏づけるものではないであろうか。すでに Thoreau の *Walden* の構成についてはざっと述べたのであるが、最も端的には *Walden* は「冬眠状態」の「ヘビ」(第一章「経済」, 56), つまり「目を閉じてまどろむ」生活, “daily life of routine and habit” の超克のあとに “exhilarating and sublime” な境地 (第2章「住んだ場所とその目的」, III) の実現を目指す構成を持つ作品だった。カタードン山頂での Thoreau の “exhilarating” な「カオス」体験には、あの Emerson 哲学を実践したと想定された作品, *Walden* の構成の何かがすでに暗示されていたのでないだろうか。すでに見たように南方熊楠では「カオス」, 偶然性がとくに粘菌研究と分かち難く結びつくはずのものであった。しかし Thoreau においては「カオス」, 偶然性は彼に及んだ Emerson 哲学の影響と深く関わっていたのである。Emerson 哲学での “routine” の超克には「カオス」, 偶然性との出会いが予期されており、実践する哲学者、Thoreau はこの出会いをもあえて実践しようとしたのだ。じっさい Thoreau は実践しない哲学者を真の哲学者として認めていなかった。*Walden* で Thoreau はこういうのである——“To be a philosopher is not merely to have subtle thoughts, nor even to found a school, but so to love wisdom as to live according to its dictates....It is to solve some of the problems of life, not only theoretically, but practically.” (第一章「経済」, 29) 鶴見氏は『南方熊楠』(1981) で Thoreau も南方も「自己の考えを生活の中で実践したという意味で思想家であった」(234) と述べ、さらに Thoreau の「米墨戦争反対・投獄と南方熊楠の神社合祀反対・投獄とは現代につらなる重要性において、また、その独創的で劇的な運動形態において東西の双壁である」(235) と適切に説明する。

すでに述べたように鶴見氏は南方が描いた粘菌と曼荼羅図の間に類似性を発見していた。それらは互いに「よく似ている」と述べていた。じっさい南方は「ファジーな」極微の粘菌の研究を毎日続けながら、そこに自らの曼荼羅を、すなわち「カオス」と偶然性の織り込まれた“宇宙の縮図”を観察していたのであろう。他方、“walker”の Thoreau は、すでに述べたように毎日の散

策で周囲の自然を観察しながらも、自らを「中心」とする“microcosm”の中に—“macrocosm”と切り離し得ない“microcosm”の中に—生きていた。「大宇宙」と同質である「小宇宙の中に」生きる存在であることを確認していたにすぎなかったのだ。むしろ Thoreau とは“microcosm”に向かって求心すれば、その分“macrocosm”に向かって遠心する超絶主義者、Thoreau 自身の言葉を用いてさらにいうなら、“a microscopic and a telescopic world”の「中間 (between)」の存在だったのである—“Who placed us with eyes between a microscopic and a telescopic world?” (*The Journal of Henry David Thoreau* 1962, vi: 133) Thoreau はある時には科学者として“a microscopic world”にいつそう関わり、他の場合には哲学者、文学者として“a telescopic world”にいつそう関わっていたのだ。そして一方に関われば、他方の、他方に関われば一方の理解が妨げられてしまうと嘆いていたのであった。(vol: III: 336-37, IV: 366) Thoreau が“a microscopic world”にいつそう傾いたとき、このときある意味では彼は粘菌学者としての南方にいつそう近づいたといえるだろう。

Thoreau, 南方と子供たちの関係について一言して本論を結びたい。Walter Harding は、Rita K. Golin が編集した *Thoreau among Others: Essays in Honor of Walter Harding* (1983) 中の自らのエッセイ“Thoreau and Children”で Thoreau が子供たちを“potential founts of wisdom”とみなしていたという。(86) Thoreau には無邪気な子供たちは *Walden* の最重要な面と深く結びついていたのである。というのも、すでに見たように *Walden* で Thoreau は“wise man”が“universal innocence”を実現した存在であると説いていたのであるから。ヒンズーとしての Thoreau を想起し、もう一度繰り返すなら、Thoreau は、この実現をこそ、大宇宙我・ブラーマ・梵との一致をこそめざしていたのであるから。Harding も「子供たちがなぜ Thoreau をこんなに魅きつけたか」というと、それは子供たちが“innocent”であり、「大人の偏見」で彼を判断しなかったためであると説明する。(101) さらに、Harding はこう述べて自らのエッセイをしめくくる—“But I think it was perhaps even more that they recognized that though he was an adult in years, he was still a child at heart.” (101)

南方の行動も研究も偏見から解放された天衣無縫なものだった。子供たちと南方との間には深い親近性があった。子供たちは“still a child at heart”であった南方に自ずと魅かれ、南方も子供たちに自ずと魅かれた。調べれば調べるほど南方と子供たちの仲が親密だったとわかるのである。南方は突然精神に異常をきたした一人息子の熊弥を非常にかわいがっていた。自分の子供をかわいがるのは親の常だ。しかし、南方は自分の子供も他人の子供も等しくかわいがったのである。弟の常楠からの送金も絶え、やけになり、酒とけんかの毎日を送ったあと、34歳の南方は1900年(明治33年)9月1日ロンドンを去りまことに不本意な帰国をした。それから10年後南方は近所の子供たち3人と次の写真を撮った。



(『南方熊楠全集』(1973) 第6巻収録)Dickins との共訳『方丈記』を12世紀の Thoreau と呼んで『王立アジア協会雑誌』に掲載してから5年後のことである。左より目良純, 南方, 秋山清, 目良正夫。正夫は純の兄で, 2人は医師目良三柳の子, また正夫は私の義父である。

写真の裏には南方の戯文がこう記されている—「再度海外へ志して紀伊の国(牟婁)の津に事とのへまち侍りし時, たびたびの討ち死にに, 袋の底をたたき一貴一賤人交を知ると, 人の心も秋風立ちそめし折柄, 日頃柿餅などくれたりし目良の坊兄弟, 報恩此時也と, 義兵を挙げ……」。 「袋の底をたたき」とは大酒, 散財をし尽くしたの意である。南方のこの戯文はまことに端的に彼と近所の子供たちとの親密な仲を物語る。私自身, 義父から何度か南方がいかにか “still a child at heart” であったかについて, 天衣無縫であったかについて聞いている。大人以上に子供たちは南方に「一つの生命体」という「宇宙」を端的に暗示したのではないかと思われるのである。

(南方熊楠と子供たちの写真提供者, 義弟, 目良卓氏〈石川啄木研究家〉に御礼申し上げる)

註

- 1) 『ヘンリー・ソロー研究論集』第28号 日本ヘンリー・ソロー学会 (2002年3月号) 11-22での拙論「H. D. Thoreau と曼荼(陀)羅象徴」では C. G. Jung の理論を背景にして Thoreau の *Walden* に曼荼(陀)羅の “diagram” を見出そうとした。すなわち *Walden* に “宇宙の縮図” を探ろうとした。個人と, 個人を超えて世界を支配するブラーマ・宇宙我との一致を, いわば “microcosm” と “macrocosm” の一致を説くインド思想とは—Thoreau に深く浸透するこの思想とは—『ヘンリー・ソロー研究論集』第28号で述べたように, 人類に広く共通する集合的無意識の Jung 説に通じるところがあるのだ。
- 2) Richard Tuerk が *Central Still* (The Hague: Mouton (1975) で指摘したように, Thoreau の批評家は, すでに “circle” を Thoreau での「最も重要なイメージの一つである」とみなしてきたのだった。(16)

- 3) 「カオスと太古の夜」とは、本文において、直ぐあとで見るように Thoreau により引かれた John Milton の *Paradise Lost* II 970-74 の冒頭の詩句。Thoreau は Milton を Shakespeare 以上に高く評価していたといわれる。

Works cited

- Baker, Robert High. "The Unsettled Wildness." Ph. D. Diss., The University of Texas at Austin, 1979.
- Bradford, Torrey & Allen, Francis H. eds. *The Journal of Henry David Thoreau*. New York: Dover Publications, 1962.
- Cook, Reginald Lansing. *The Concord Saunterer*. New York: AMS Press, 1940.
- Fairbanks, Jonathan. "Thoreau: Speaker for Wildness." ASQ, 1970.
- Golin, Rita J, ed. *Thoreau among Others: Essays in Honor of Walter Harding*. State University College of Arts and Science at Geneseo, 1983.
- Hicks, John H. ed. *Thoreau in Our Season*. The University of Massachusetts Press, 1962.
- Hourihan, Paul. "The Inner Dynamic of the Emerson—Thoreau Relationship." Ph.D.Diss., Boston University Graduate School, 1967.
- Jung, C. G. *Collected Works*. Vol. IX, Part I. New Jersey: Princeton University Press, 1968.
- 松長有慶ほか 『即身—密教パラダイム』東京：河出書房新社，1988.
- 南方熊楠 『南方熊楠全集』第10巻 東京：平凡社，1971.
…… 『南方熊楠全集』第6巻 東京：平凡社，1973.
- Smith, David C. *The Transcendental Saunterer*. Savannah: Frederic C. Bell, 1997.
- Stoller, Leo. *After Walden*. Stanford: Stanford University Press, 1957.
- Thoreau, Henry David. *The Maine Woods*. New Jersey: Princeton University Press, 1983.
…… *Walden*. New York: W.W. Norton, 1951.
…… *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Boston: Houghton Mifflin, 1961.
- 鶴見和子 『女書生』東京：はる書房，1996.
…… 『南方熊楠』東京：講談社，1981.